

ンスレベルになるはずだとただしたが、この現象は助詞学習とは別の問題であろうと答えた。ここで鹿取(東大)から、助詞学習の段階ができてきて日常的な文脈にのるものと考えするという意見が出された。また横山(慶応大)から、小さい子供の場合しばしば「を」が省略されるとの指摘があった。

高木(523):横山(慶応大)は、surface structureだけをシンタックスといているが、シンタックスをどうとらえているのかとただし、これに対して、

surface structureの特性をもう少し捉えていってもよいと思う、というのは意味の問題に立ち入らないでもう少し検討したいと答えた。

山田ほか(524):横山(慶応大)が、シンタックスの発達的研究との関連についてただしたのに対して、鹿取(東大)は、現在、将来ともチョムスキーに関係させるつもりはないと応答した。

なお、横山ほか(525)に関する質疑はなかった。

(田中敏明・横山浩司)

学 習 過 程 (526~534)

座長 藤 嶋 輝 子・山 本 多喜司

- 526 図形再認におよぼす言語命名の効果
 広島大学 ○松 村 ひろ子
 福岡教育大学 横 山 正 幸
- 527 ランダム図形の再認に及ぼすラベリング効果について
 東筑紫短期大学 福 田 敏 子
- 528 図形の Distinctive-feature に対する Naming 効果
 広島大学 永 江 誠 司
- 529 幼児の学習における言語的媒介と獲得等価性(II)
 一言語化の時期と年令差について—
 帝国女子大学 ○泰 淑 子
 大阪教育大学 北 尾 倫 彦
- 530 幼児の図形同一視におよぼす刺激次元分化の効果
 東京成徳短期大学 藤 嶋 輝 子
- 531 図型の認知的類似性と四分割法に依る
 理論的類似性との関係
 室蘭工業大学 馬 場 雄 二
- 532 空間関係の認知に関する発達的研究
 —ノンメトリカルな空間の構成の内化について—
 お茶の水女子大学 中 塚 みゆき
- 533 空間に於る位置関係の理解に及ぼす運動的手掛りの効果
 京都大学 岩 田 純 一
- 534 動物による空間の探索と構造化の研究(2)
 広島大学 山 本 多喜司

発表テーマにもとづいて、526~530、531~534の2つの群に分けて討論がすすめられた。従って概要もこの2群に分けて報告する。

I 全体的特徴

松村(526)は刺激に適合する適切命名と、適合しない不適切命名の2条件が線図形の再認におよぼす効果の発達的变化について検討し、言語命名が再認に有効であること、その働きは発達的に変化すること、また課題によっても異なることを明らかにした。

福田(527)はランダム図形の再認において、被験者が自己ラベリングをした後で、その図形に対して適切あるいは不適切なラベルを呈示することが、どのような影響を及ぼすかを検討し、自己ラベルすることが再認を促し、また適切ラベルは自己の言語反応を強化して再認を促進することを明らかにした。

永江(528)は distinctive feature の学習は特に適切な名称の効果をまつまでもなくなされるが、non-distinctive feature の学習には適切な名称が有効であり、図形の distinctive feature を中心に nondistinctive feature をも含めた図形全体の構造化に効果をもっていると考えた。また不適切名称は再認を妨げるという結果を報告した。

泰(529)は幼児における言語命名の媒介効果を発達的に検討し、5、6才児では刺激への共通のラベルを獲得しただけでは媒介は成立せず、それを後の学習で言語化してはじめて効果的になるのに対し、7才児では共通ラベルの獲得だけでも媒介効果は成立すること、また媒介効果は運動反応時に言語化を行なう場合に顕著であることを明らかにした。

藤嶋(530)は刺激のもつ諸属性(単に関連次元のみならず不関連次元も含めて)について前もって弁別させておくという手続きが、幼児に刺激次元を分化することを可能にさせ、そのことが同じ次元を含む後続の図形同一視課題遂行に対して正の転移をもたらすこと

を検証した。

II 討論の内容

527 に対して北尾らから、学習段階と再認段階の間でクレペリン作業を課した理由が「問され、「リハーサルを防ぐため」と答えられた。また自己ラベリングさせることに對し「その必要はないのではないか」という質問には、「自己ラベリング後の適切、不適切ラベルの効果をみたかった。」また「自己ラベルと適切ラベルが一致することが多いということだがどの程度一致するのかデーターを知りたい」、「自己ラベリング群と適切ラベリング群に差がなければ、クライテリオン群として意味がないのではないか」等の疑問が出された。

526 に対して、目的の所で述べられている言語命名についての3つの見解のどれか一つを主目的とした方がよかったのではないか、注意説はふさわしくないのではないか、527 と 526 の結論をませ合わせたようなものがよいのではないか（北尾）という意見が述べられた。また 526 では適切、不適切命名ともに促進効果があり、527 は不適切ラベリングは統制群と差がない、528 は不適切ラベリングは再認を妨げるといふ異なる結果が出た原因についての質問（藤嶋）に対して、被験者の年齢と手続上のちがいがあげられた。

528 に対して、馬場から図形の複雑性と distinctive feature の関係について質問があり、「今回の実験では複雑な所に distinctive feature があるような感じがした。複雑な所に意味づけをしたと考えられる」という答えがあった。さらに「意味的適合があれば再認がよくなったその説明概念として何を使うか」「構造化することによって適切な命名を与えることによってなされるということは分かるが、構造化とは何を意味するのか」などの意見が述べられ、最後に京大園原教授より「distinctive feature は現象的なもので、今のは representative feature、全体を代表する部分ではないのか、それを言語が促進すると考えられないのか」という意見が述べられた。また以上の4発表に対して、どんな理論の下でラベリング効果を検討しようとしているのかという意見があった。

529 には「こんな問題に対していくつも学習を行なわせた理由」（馬場）、「鍵を押す直前に言語化させる段階と、言語化しながら鍵を押す段階とどんな違いがあるのか」（藤嶋）などの疑問が出された。

530 に対しては、前学習で三つの次元の弁別を経験した実験群は各次元間の移行がスムーズであったのに対し、それを経験しなかった統制群は移行が困難で

あったことの一つの説明として、5才児の形次元への preference ということを挙げていたのに対し、preference を必ずしもここでもってこなくてもよいのではないかという疑問が北尾から出された。

馬場 (531) は、認知的に類似していると評価された漢字—漢字様図形を 12 対、類似性の程度にしたがって 3 群に分け、その類似性を digital 的、analog 的に分析し理論づけを試みた。その結果、細目検討でも全体印象把握においても、認知的類似性が理論づけできたとしている。

中塚 (532) は、対象物の空間物系の認知における内化（具体的対象物および外的行為をとともなわない空間の構成）の程度の発達を明らかにしようとして、操作的イメージ（一度構成された座標系を回転した後関係位置を報告させる）による方法と、図式的イメージ（座標系を変えないで報告させる）による方法とを比較した。内化の程度は、対象物の数、半具体物による補助の有号、基準点を移行させる回数、基準方向の次元数、基準点の出発となる対象、回転方向、報告のさせ方などによって異なることを見出した。

岩田 (533) は三次元空間での空間位置関係を理解する際、Piaget のように子どもの反対側に人形をおき、人形からの見えを予想させるようなやり方と、ターンテーブルを 180° 回転した後関係位置を予想させるようなやり方と、実際に反対側への子どもを回らせて予想構成をおこなわせるやり方とを比較して、運動的手がかりの効果を調べた。その結果人形の視点から対象の位置関係を予測することは、他の2つのやり方よりも難ずかしいことが分った。

山本 (534) は“man-environment 関係”の基礎的研究として、動物を用いて空間体制化の道程を“micro-genetic な発達”の観点から研究した。そして、未知の物理的環境の中に、動物にとって親近感のある対象が含まれている時には、その対象物が home base 又は anchor point となって、空間の構造化や体制化が進むことを見出した。

531 に対して、刺激図形を選択する際に図形のもつ意味をどのように考えたかと問われたが、別に考慮しなかったと答えられた。

532 に対して、北尾は内化の発達の研究よりも、内化のメカニズムを明らかにする方向への研究が必要なのではないかと示唆した。

533 に対して、中塚は子どもを回らせる際の方向、ターンテーブルを回す場合の時間なども統制しておいてはと述べた。

534 では、用いられた測度が空間体制化の測度とし

て完全であるとの質問に対して、山本は必ずしも十分ではないが、観察者によって記録された動物の探索行動の軌跡図は体制化の過程をよく示していると答えた。又対象物を親近化させる間のケージの狭さが、後

の活動量を増大させてはいないかとの批判に対して、本研究の目的から云えば、この点はあまり問題にならないと答えられた。

(藤嶋輝子・山本多喜司)

学 習 過 程 (535~541)

- 座長 大 島 浩・亀 口 憲 治
- 535 認知に及ぼす情動の効果
—ストレス・フィルムによる知覚判断の変容—
九州大学 原 口 芳 明
- 536 英語修得度と動機づけ・社会的態度
東京大学 谷 本 なほみ
- 537 しつけにおける小学生の母親について—
広島大学 ○大 島 浩
" 広 畑 亘
" 市 川 淳 章
- 538 複雑な学習材料における情報フィードバックの遅延効果
慶応義塾大学 ○岩 田 茂 子
" 並 木 博
- 539 意志動機の葛藤
—計算作業の誤りに及ぼす催眠の動機の分析—
九州大学 門 前 進
- 540 身体軸認知におよぼす感覚手がかりの効果
九州大学 亀 口 憲 治
- 541 そろばん技能習熟者の珠算暗算能力
東京大学 ○三 宅 芳 雄
独協大学 波多野 誼余夫

I 全体的特徴

原口(535)は、認知変容量に関し、ストレス・フィルム呈示に先立つ教示がフィルム呈示後の再認課題のパフォーマンスに促進効果を与えたことを示した。谷本(536)は、結果としては明確ではなかったが、英語学習と動機づけや社会的態度との間に相関があることを示唆した。大島ら(537)は、しつけにおける賞と罰の実態を都市、農村部で比較・検討し、しつけに関する情報入手の方法、体罰の必要性、子供の将来像等で地域差があるとした。岩田(538)は、IFの遅延に関する処理はどの測度についても有意な効果を示さず、したがって複雑な学習材料については、反応ごとのIFの遅延は、獲得過程および、把持において少なくとも負の効果は持たないと結論した。門前(539)は、ある種のトランス状態が生じると下意識動機と意識動機と

の葛藤を示す反応も生じる事実のあることを指摘した。亀口(540)は、身体軸認知において、依拠する感覚手がかりを与える感覚器の身体軸上の位置が重要な役割を持つことを示した。三宅ら(541)は、そろばん技能習熟者の珠算暗算能力を各種の妨害条件を与えて測定し、条件効果に複雑かつ微妙な差異のあることを明らかにした。

上に概略したように、各々の研究がかなり異なった問題意識に立ち、方法論も異なるために、統一したテーマのもとに討議することはできなかった。しかし、それぞれの研究が既成の枠にとらわれない研究の新しい方向を模索しつつあることは、討議を通じて確認された。

谷本(東京大)に対し、門前(九州大)より、テストの意図に関して質問が出され、カナダにおける仏語修得に関する研究に基づいているとの答があった。波多野(独協大)より、学習態度や好き嫌いとの学習過程との関連を追及する研究としての本研究の特徴は何であるかとの問が出され、谷本は外国語学習において、知的側面のみ重点がおかれている現状に対し、文化的接触の要因を重視することの必要性を強調した。さらに、波多野は、好きにさせるという事はどういうことかと質問し、それは外国語を使う必要性を感じるようにもってゆくことであり、その文化に興味を持たせることであろうと谷本は答えた。

岩田(慶応大)の発表に対しては、類似の研究を進めている松浦(大阪教育大)より、3つの質問がなされた。第1の質問として、遅延時間を60秒に設定した理由が問われ、実験Iでは特別な根拠がなかったが、実験IIでは、被験者の注意の分散をふせぐために、30秒にしたとの答があった。次に、programmed(Pr)の内容の説明が求められ、岩田は、特別に工夫されたものではなく、学習材料が易から難に並べられていることを意味していると述べた。さらに、松浦からIFの遅延効果は実際にそこで何が起っていると考えるかとの質問がなされ、岩田は、具体的には分からないが、複雑な課題では、多種類の情報操作が行なわれるためであろうとの説明があった。

大島ら(広島大)の研究は、動物を用いた賞罰の間